沖縄与那国方言の動詞活用資料

目差　尚太（沖縄国際大学・日本学術振興会）

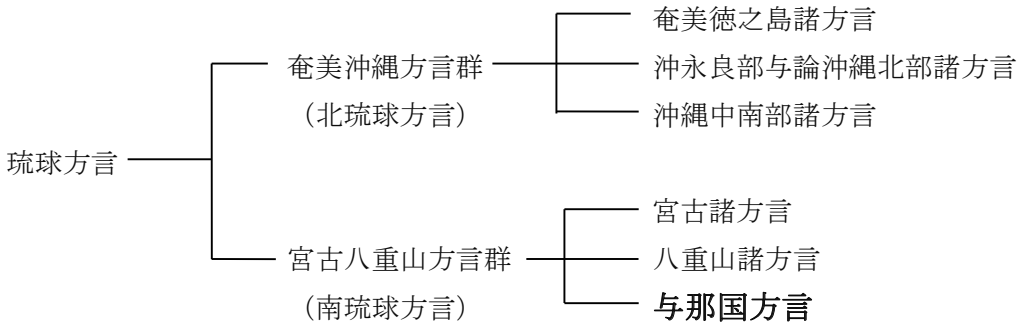
１　はじめに

本報告では、日本最西端の与那国島で伝統的に話されている与那国方言の動詞活用の資料を掲載する。本報告のデータは、与那国島出身の話者 U.T（昭和 8 年生・男性）のご協力によって得られたものである。調査は 2019～2022 年の複数回行われた。データは、調査票にある日本語標準語を訳して頂く形で得られたものだが、訳と方言形式が完全に一致していない例もあるので、この資料を用いて分析・研究するにあたっては注意されたい。格やとりたて、モダリティ形式等の文法形式に関する先行研究を踏まえた上で分析・研究して頂きたい。

以下、2 節で与那国方言の概要、3 節で与那国方言の先行研究について述べ、4 節で動詞活用資料を報告する。

２　与那国方言の概要

一般的に、琉球方言は、奄美沖縄諸島の北琉球方言、宮古八重山諸島の南琉球方言に分かれる。対象言語は、南琉球方言に属する、日本最西端の与那国島で伝統的に話されている与那国方言である。



2009 年ユネスコは、消滅の危機に瀕する世界の諸言語のうち、特に重要な 2400 の言語を挙げたが、中でも重要な危機に瀕している言語に奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語をあげ、与那国方言もその中に含めている。山田真寛,トマ・ペラール(2013)は、与那国方言の実際の危機的な状況について示している。

与那国島の人口は 1670 人（2021 年 11 月、与那国町ホームページによる）[1]であり、

[1] 2021 年 11 月、与那国町のホームページによる。
https://www.town.yonaguni.okinawa.jp/docs/2018042800012/household.html

与那国方言の話者の数は、50 代後半以上の約 400 人いることが報告されている[山田他 2013：p.205]。与那国島には、祖納、比川、久部良の 3 つの集落がある。高橋 1997、山田他 2013 は、これらの集落の間に方言差がないと、報告している。この 3 つの集落で話されている言語・方言のことを「与那国方言」とまとめている。

３　与那国方言の先行研究と資料

研究と資料は、A）語い、B）文法、C 音韻に分かれている。A）については、高橋(1986)「琉球の方言八重山・与那国島」、高橋(1987)、池間(1998)『与那国ことば辞典』、池間(2003)『与那国語辞典』、米城・中澤(2021)『どぅなんむぬい辞典』があげられる。B）については、概要的な、あるいは、簡易的な記述文法研究と資料としては、平山・中本(1964)『琉球与那国方言の研究』、高橋(1997)「琉球列島の言語（与那国方言）」、山田・トマペラール・下地(2013)「与那国語の簡易文法と自然談話資料」、目差 2022「与那国方言」があげられる。C）については、上野(2009)「与那国方言のアクセント資料（1）」やかりまた(2013) 「与那国語におきた音韻変化」等があげられる。

４　与那国方言の形容詞資料

例文資料は、2019~2022に行った聞き取り調査で得たものである。複数の形式が得られた場合は｛A／B／C｝のように示している。例文は、上段：与那国方言の文、下段：標準語文で示している。表記は、狩俣(2022)のカタカナ表記に従っている。

	標準語
1	ンミン　ハリヤ　ビンカ゛カ゛ドゥ　ンニ　ククヾ。 どこでも　ハーリーでは　男が　舟を　漕ぐ。
2	バガタル　バスヤ　ブールシドゥ　ンニヤ　クディタン。 若い　ときは　みんなで　舟を　漕いだ。
3	ナイ　アタンティン　ミヌカ゛カ゛ヤ　ンニ　クカ゛ヌン。 今でも　女は　舟を　漕がない。
4	スヤ　ティーカ゛　ダミドゥ　キリャー、ンニヤ　クカ゛ヌン。 今日は　手が　痛いので、　舟を　漕げない。
5	ダミカ゛　ヌタバ、　ンニン　クカ゛リルン。 病気が　治ったから、舟も　漕げる。
6	アッタン　ウンナガンキ　ヒルン。 明日も　海へ　行く。
7	イスントゥヤ　ハリタヤ、ウンナガンキ　ヒルン。 漁師は　晴れたら　海に　行く。
8	イヤヤ　ワシキカ゛　バラサル　バスヤ　ウンナガンキヤ　ヒラヌン。 父は　天気が　悪い　ときは　海へは　行かない。

9	アカ゜ルツヤ　シカマ　キティ、ドゥルヤ　アンビンディ　ヒタン。 昼間　仕事を　して、　夜　遊びに　行った。
10	スヤ　イヤティカ゜　ダンキ　クン。 今日は　叔父が　家に　来る。
11	アブタティヤ　クヌン。 叔母は　来ない。
12	アサヤ　イヤティンキ　デンワ　キティ、イティク゜　クラミタン。 祖父は　叔父に　電話を　して、　いとこを　来させた。
13	マク゜ン　シ　ブサ　キ　ブタバ、　クラミタン／クラミリャン。 孫も　来たがって　いたので　来させた。
14	イヤティン　イティク゜ン　バスガラ　スタン。 叔父も　いとこも　バスから　来た。
15	ハンタヤ　ウドゥブサルユンガラ、アカ゜ミティンタヤ　クンナ。 崖の側は　危ないから、　子どもは　来るな。
16	グンガチヤ　アラグ　アミ　フイドゥ　キル。 5月は　よく　雨　降る。
17	ドゥニンガチヤ　アミヤ　ナンドゥ　フラヌン。 12月は　雨　あまり　降らないよ。
18	ンヌン　アミカ゜　フタン。 昨日も　大雨が　降った。
19	アミ　フイドゥ　アイグー。 あ、雨　降って　きた。
20	ウブアミ　フタバ、　ハチ　ナカ゜リタン。 大雨が　降ったので、橋が　流された。
21	タルヤ　イーチン　ガックヌ　マイバラニ　ウリルン。 太郎は　毎日　学校の　前で　バスから　降りる。
22	ドゥチンタヤ　サティニ　バス　ウルン／ウリタン。 友人が　さきに　バスを　降りた。
23	クミヤ　ターン　ウリラヌ。 この　バス停では　誰も　降りない。
24	ウミタヤ、キヌ　ナイヤ　カナーディ　ウティルン。 熟したら、木の　実は　自然に　落ちる。
25	キー　ドゥラタンティン、ウティラヌン。 青い実は　木を　揺らしても、　落ちない。
26	キー　ドゥラタバ、　ウティタン／ウットゥン。 木を　揺らしたから、落ちた。
27	ビキ゜ンマン　ミーンマン　ʔトゥ　キャンギルン。 オスの馬も　メスの馬も　人を　蹴る。

28	ウトゥナサル　ンマヤ　ʔトゥー　キャンギラヌン。 おとなしい　馬は　人を　蹴らない。
29	ウトゥナサル　ンマカ゜　ʔトゥー　キャンギタン／キャンギャン。 あの　おとなしかった　馬が　人を　蹴った。
30	イヤヤ　クドゥ　カール　ムヌン　ʔカッティルン。 父は　去年　買った　ものでも　捨てる。
31	マビン　カリル　ムヌドゥ　アカ゜、ラジオ　ʔカッテャン／カッティタン。 まだ　使えるのに、　ラジオを　捨てた。
32	アブヤ　ヌンニ　フルビタンティン、ʔカッティラヌン。 祖母は　どんなに　古くても、　捨てない。
33	イヤヤ　ダンドゥル　ラジオ　ウトゥトゥンキ　ʔカッティミタン。 父は　壊れた　ラジオを　弟に　捨てさせた。
34	ターンキン　カヌンキ、　ʔカッテャンサイ。 誰にも　聞かないで、捨てて　しまった。
35	ヌグディシ　カリ　ブル　キヌ　ドゥダ　ツン。 ノコギリで　枯れた　木を　切る。
36	ンヌ　カリ　ブル　キヌ　ドゥダ　チャン／バッテャン。 昨日　枯れた　木の　枝を　切った。
37	イヤティカ゜　マドゥン　チー　トゥラタン。 おじさんが　一緒に　切って　くれた。
38	ニグラヌンディ、タン　ガジュマル　ツァヌン。 こわくて、　誰も　ガジュマルを　切らない。
39	アナヤ　スコップシドゥ　フル。 穴は　スコップで　掘る。
40	イヤヤ　フルカ゜、　アブタヤ　フラヌン。 お父さんは　掘るけど、お母さんは　掘らない。
41	タイントゥシ　ʔクァル　アナ　ファン。 二人で　とても　深い　穴を　掘った。
42	イヤンキ　スダンキティ、アニサンキ　フラミタン。 お父さんに　頼んで、　兄さんにも　掘らさせた。
43	キヌミカ゜　ナイドゥ　ブカ゜、アサカ゜　ドゥヌドゥシ　ウトゥシツァヌン。 木の実が　熟したのに、　祖父は　自分では　落とせない。
44	アサカ゜　イヤンキ　ンディティ、スナティンキ　キヌナイ　ウタミタン。 祖父が　父に　言いつけて、兄に　木の実を　落とさせた。
45	イヤカ゜　スナティンキ　ブーシ　キヌナイ　ウタミタン／ウタミャン。 父が　兄に　棒で　木の実を　落とさせた。

46	スナティカ゜　キヌナイ　ブール　ウトゥシャン。 兄が　熟んだ　木の実を　全部　落とした。
47	スディ　キル　バスニヤ　ニムティヤ　フガンキ　ンダン。 掃除の　時には　荷物を　外に　出す。
48	ウトゥトゥン　ムヌ　フガンキ　ンダシャン。 弟も　台所に　あった　荷物を　外に　出した。
49	アミ　フタヤ／フイカ゜シヤ、ニムティヤ　フガンキ　ンダヌン。 雨が　降ったら　荷物は　外に　出さない。
50	アブカ゜　アブタンキ　ンディティ、ホースシ　ミン　アラミタン。 祖母が　母に　言いつけて、ホースで　水を　流させた。
51	アブタカ゜　ハナコンキ　ホースシ　ミンシ　アラミタン。 母が　花子に　ホースで　水を　流させた。
52	イヤカ゜　スナティンキ　ンディティ、　アサ　ウガミタン。 父が　兄に　寝ている　祖父を　起こさせた。
53	スナティカ゜　アサ　ウガミタン。 兄が　寝ていた　祖父を　起こした。
54	ウトゥトゥヤ　ンダイトゥドゥ　アカ゜、ニディティシ　ハチ　ムトゥン。 弟は　左利きだけど、　右手で　お箸は　持つ。
55	チルナビヤ　アンディドゥ　キルユンガラ、カタティシヤ　ムトゥンナ。 汁鍋は　こぼれやすいから、　片手では　持つな。
56	ドゥバグヤ　アブタカ゜　ムテャン。 おにぎりの　入った　重箱は　お母さんが　持った。
57	アブンキヤ　サー　ムタミタン。 おばあさんには　お茶を　持ってもらった。
58	アサンキヤ　ムス　ムタミャン。 おじいさんには　ムシロを　持たせる／持ってもらう。
59	ウトゥトゥンキヤ　ダカントゥ　サバンヤ　ムタミルン。 弟には　ヤカンと　湯呑を　持たせる。
60	イヤンキヤ　ヌン　ムタミラヌン。 父には　何も　持たせない。
61	インサカ゜、マビン　ムタリルナー？ 重いけど　もっと　持てる？
62	アトゥ　ʔトゥチヤ　ムタリルン。 あと　一つだったら　持てる。
63	ムタニヌタヤ、アカ゜　ムティ　トゥラン／ムトゥンドー。 持てなければ、私が　もって　あげよう。
64	イチン　ワーヌミーヤ　イヤカ゜ドゥ　カイ　ク。 いつも　豚肉は　お父さんが　買う。

65	フガニヤ　ヌン　カヌン。 他には　何も　買わない。
66	イヤヤ　ンヌヤ　ダサイ　カタン。 お父さんは　昨日は　野菜を　買った。
67	アサティヤ　キューリョービドゥ　アルユンガラ、アッタヤ　カニヌン。 明後日が　給料日だから、　明日は　買えない。
68	スヤ　ディン　ミヌユンガラ、カイ　ブサタンティン、カニヌン。 今日は　お金が　無いから、　買いたくても、　買えない。
69	アサティ　アタヤ、フサル　ムヌ　カリルン。 明後日だったら、　欲しい　ものが　買える。
70	マイガラ　カイ　ブサタル　ムヌ　カリタン。 前から　買いたかった　ものが　やっと　買えた
71	ディンカ゜　アタヤ、ヌン　カリルン。 金が　あれば、なんでも　買える。
72	ʔトゥヌ　ヌティヤ　ディンシヤ　カニヌン。 人の　命は　金では　買えない。
73	イヤカ゜　トゥイ　スル　イユヤ　アブタカ゜　ウルン。 お父さんは　取って　きた　魚を　弟が　売る。
74	スヤ　トゥイ　スル　イユヤ　サガルユンガラ、ウラヌン／ウラニヌン。 今日は　魚が　少ないから、　売らない。
75	ンヌヤ　イカトゥ　タク゜　ウァン。 昨日は　私が　取った　イカと　タコを　売った。
76	クヌ　イユヤ　ダッツァグシ　ウイ　トゥライ。 その　魚を　安く　売って　ください。
77	イチン　アブヤ　アヌンキ　ディン　トゥラン。 いつも　おばあちゃんは　私に　お金を　くれる。
78	スヤ　ウトゥトゥンキ　シェンエン　トゥラタン／トゥラシャン。 今日は　弟にも　1000円　くれた。
79	アサヤ　アヌンキ　ヌン　トゥラヌン。 おじいちゃんは　私に　何も　くれない。
80	イチン　イスントゥガラ　イユ　トゥルン。 いつも　漁師から　魚を　もらう。
81	グマタティヌ　カンナティヤ　ターン　トゥラヌン。 小さい　カニは　誰も　もらわない。
82	トゥナイヌ　ダガラ　ウブニ　トゥラタン。 隣の　家から　大根も　もらった。
83	モズク　マーシク　トゥラタバ、　ブールシ　バギ　トゥタン。 モズクを　たくさん　もらったから、みんなに　分けて　あげた。

84	ヌドゥ　カラティタヤ、ミン　ヌムン。 喉が　乾いたら、　水を　飲む。
85	アカ゜　ブトゥヤ　サギヤ　ヌマヌン。 私の　夫は　酒を　飲まない。
86	バガサル　バスヤ　イグラティン　サギ　ヌマリタン。 若い　ころは　いくらでも　酒が　飲めた。
87	イヤティヤ ダミドゥ ブルユンガラ、サギ ヌミ ブサタンティン、ヌマニヌン。 叔父さんは　病気だから　酒が　飲みたくても、飲めない。
88	クマヌ　カヌミンヤ　ヌマリルン。 ここの　井戸水は　飲める。
89	サー　マーシク　ヌミャン。 お母さんが　入れた　お茶を　たくさん　飲んだ。
90	ヌル　バスニヤ　ヌムンナ。ヌミタヤ、ヌンナ。 乗るなら　飲むな。　飲むなら、乗るな。
91	アブタヤ　アガミンキ　チー　ヌマミタン／ヌマシャン。 お母さんは　赤ちゃんに　おっぱいを　飲ませてあげた。
92	ヒビダン　ウチン　ツァー　フン。 山羊も　ウシも　草を　食う。
93	ヒビダヤ　ンカ゜イ　ブル　ツァーヤ　ハヌン。 山羊は　濡れた　草は　食わない。
94	マユカ゜　イユ　ハタン／ハン。 家で　飼っている　猫が　魚を　食った。
95	イヤカ゜　トァル／トゥイ　スル　イユ　マユンキ　ハリタン。 父が　取った　魚を　猫に　食われた。
96	チヌカーディ　イチン　フラムタ、　フガニ　アンブン。 毎日　暗く　なるまで、外で　遊ぶ。
97	フラミタヤ、　タン　アンバヌン。 暗く　なったら、誰も　遊ばない。
98	ンヌヤ　イティク゜ンタトゥ　ドゥンギ　キー　アンビタン。 昨日は　いとこと　かくれんぼ／おにごっこして　遊んだ。
99	ワシキカ゜　ンサルユンガラ、アカ゜ミティンタ　フガニ　アンバミタン。 天気が　いいので、　子どもたちを　外で　遊ばせた。
100	ウトゥトゥヤ　サギ　ヌミンカ゜シヤ、　ビルン／ビドゥ　キル。 弟は　酒を　飲むと、　すぐに　酔う。
101	ウトゥトゥヤ　サギ　ヌミタバ、　ビュン。 昨日も　酒を　飲んだので、酔った。

102	スナティヤ　ヌンニン　ヌミタンティン、ビラヌン。 兄は　どんなに　飲んでも、　酔わない。
103	カリヤ　ビーティ、ニンディドゥ　ブル。 彼は　酔って、　寝て　いる。
104	サギ　ヌマミティ、ウトゥトゥ　ビラミタン。 酒を　飲ませて、　弟を　酔わせた。
105	イビタティドゥ　ヌミャル　ハデャカ゜、ビドゥ　ブル。 少ししか　飲んでいないのに、　酔って　しまった。
106	クダラトゥ　マガイ　イヤカ゜ドゥ　アル。 汚れた　皿と　お椀は　父が　洗う。
107	アヌヤ　スナティンキ　ナビ　アラミタン。 私は　兄さんに　鍋を　洗ってもらった。
108	スナティカ゜　アカ゜　カバインディ　アライ　トゥラタン／アライ　トゥラシャン。 兄さんが　私の　代わりに　洗って　くれた。
109	アブタヤ　ダサイドゥ　クルユンガラ、アラヌン。 お母さんは　料理を　作るから、　洗わない。
110	アツァル　バスヤ　ブシ　カンドゥン。 暑い　ときは　帽子を　かぶる。
111	ナイヤ　ターン　クバガサ　カンダヌン。 今は　誰も　くば笠を　かぶらない。
112	ンカチヤ　ブール　クバガサ　カンディタン。 昔は　みんな　くば笠を　かぶった。
113	イティク゜ンキヤ　ブシ　カンシミタン。 いとこたちには　帽子を　かぶらせた。
114	アヌヤ　トゥチヌカーディ　マク゜ティンタンキ　オトシダマ　トゥラン。 私は　毎年　孫たちに　お年玉を　上げる。
115	クドゥヤ　ブールンキ　シンインナー　トゥラタン。 去年は　みんなに　千円ずつ　上げた。
116	ディンヤ　ニシンインバガイ　トゥラン／トゥランディ　イシ　ブル。 来年は　二千円ずつ　上げよう。
117	アサヤ　イーチン　ロクジニ　ウギルン。 祖父は　毎日　6時に　起きる。
118	クジニ　ニンディティ、ハチジニ　ウギタン。 昨日は　9時に　寝て、　8時に　起きた。
119	グジニヤ　タン　ウギラヌン。 5時には　誰も　起きない。

120	クークーセイヤ　フク　　ツン。 高校生は　　制服を　着る。
121	ウヌ　ンナニヤ　アラグ　フルミ　ブルユンガラ、タン　ツァヌン。 その　服は　　古いから、　　誰も　着ない。
122	ンカチヤ　ドゥシ　ウァル　バショフドゥ　チタン。 昔は　　自分で　織った　芭蕉布を　　着た。
123	ザブトンヤ　　オカーサンカ゛ドゥ　ントゥルン。 ざぶとんには　お母さんが　　座る。
124	ドゥガティニヤ　タン　　ントゥラヌン。 床には　　だれも　座らない。
125	バヌヤ　　ウミ　　ントゥルユンガラ、ンディヤ　　カミ　　ントゥリ。 私たちは　ここに　座るから、　　きみたちは　向こうに　座れ。
126	ンダン　ザブトンニ　ントゥイ　トゥライ。 きみも　ざぶとんに　座って　　ください。
127	イーチン　アサヤ　ウンナガドゥ　ンニ　ブル。 毎日　　祖父は　海を　　見る。
128	ンヌブトゥティヤ　クジラ　　ンナニヌン。 最近　　クジラを　見ない。
129	ンヌヤ　クジラ　　ンニタン。 昨日　　クジラを　見た。
130	ンダン　ンニ　ブサタヤ、ンニティ、　　マク゛ンキ　ンシミタン。 お前も　見たかったら、　見ろといって、孫に　　見させた。
131	アリガトーンキヤ　　ホーゲンシ　フガラサンディ　ンドゥ。 「ありがとう」には　方言で　　「～～～～」と　　言う。
132	スナティヤ　トゥン　ンダヌン。 兄は　　何も　　言わない。
133	アブタヤ　　ウトゥトゥンキ　バラサキリンディ　ンタン。 お母さんは　弟に　　「あやまれ」と　　言った。
134	スナティヤ　ウトゥトゥンキ　ハナンキ゛キンナンディ　ンディティ、クンドゥンディタン。 兄は　　弟に　　「いたずらするな」と　言って、しかった。
135	ウトゥトゥヤ　スナティンキ　バカンディ　ンディ　ミヌタン。 弟は　　兄に　　「ばか」と　言って　しまった。
136	サンサヤ　スグ　　ンニルン。 蝉は　　すぐに　死ぬ。
137	?トゥンキ　ンニリンディ　ンディヤ　ナラヌン。 人に　　「死ね」って　　言っては　いけない。
138	クンダヤ　　スグニヤ　ンニラヌン。 ゴキブリは　すぐには　死なない。

139	クドゥヤ　サーリキー、アタビンカ゜　マーシク　ンニタン。 去年は　ひでりで　カエルが　たくさん　死んだ。
140	アッツァビ、ダーヌ　マユン　ンニ　ミヌンサイ。 暑くて、　家の　ネコも　死んで　しまった。
141	クヌ　チマニヤ　ンナトゥカ゜　アン。 この　村には　港が　ある。
142	ンカチ　チマニヤ　セイトーコージョーカ゜　アタン。 昔　島には　製糖工場が　あった。
143	セイトーコージョーカ゜　アタル　ドゥグルニ　ガックー　クァン。 製糖工場の　あった　ところに　学校を　建てた。
144	アイ　ブタンティン、シャナ　キンナ。 有っても、　喜ぶな。
145	ミヌタンティン、ナグナ。 無くても、　泣くな。
146	ʔトゥヤ　ヒライバドゥ、バガルン。 人間の　良し悪しは　後でこそ　分かる。
147	マース　ミヌン。 塩が　ない。
148	カマドゥヌ　ウヤビニドゥ　アタルドー。 かまどの　上に　あったよ。
149	サタン　ミヌタン。 砂糖も　なかった。
150	ミヌタヤ、アカ゜　カイ　クンドー。 無ければ、私が　買って　来よう。
151	イティバンダーニヤ　ʔトゥカ゜　マーシク　ブン／ワルン。 座敷には　人が　たくさん　いる。
152	ンダヤ　チムニャニ　ブイ　トゥライ。 あなたは　しばらく　台所に　いて　ください。
153	ナイナガティバギンヤ　イティバンダーニ　ʔトゥカ゜　ブタンドー／ワタンドー。 さっきまで　座敷に　客が　いた。
154	イティバンダーニ　ブタル　ʔトゥンタカ゜　ブール　カイシ　ヒタン／カイシ　ヒュン。 座敷に　いた　人たちが　みんな　帰った。
155	ブール　ダンキ　ワイティ、ナイヤ　タン　ワラヌン／ブラヌン。 みんな　かえって、今は　だれも　いない。

156	バガサル　バスヤ　ナーハンキバギン　アイティ　ブタル／アイテャル／アイティタル　ʔトゥカ゜　ブタンドー。 若い　ころは　那覇まで　歩いた　人が　いた。
157	スナティヤ　イヤカ゜　ンディ　ワル　ムヌヤ　ヌーン　キルン。 兄は　お父さんに　言われたら、　何でも　する。
158	スナティヤ　ンダヌカ゜シヤ、　ヌン　キラヌン。 兄は　言われなければ、何も　しない。
159	スナティヤ　イヤンキ　キリンディ　ンダリタバ、ハタギシカマ　キタン。 兄は　しなさいと　言われたから、畑仕事を　した。
160	イヤヤ　スナティンキ　ハタギシカマ　キミタン。 お父さんは　兄に　畑仕事を　させた。
161	アンバラヌンキ、シカマ　キリ。 休んでないで、　仕事を　しろ。
162	キヌハカ゜　チマイティ、ミドゥヌ　ミン　ナガリラヌン。 木の葉が　詰まって、　溝の　水が　流れない。
163	アブタカ゜　スナティンキ　キヌハー　トゥラミティ、ミン ナガラミタン。 お母さんが　兄さんに　木の葉を　取らせて　水を 流れさせた。
164	スナティヤ　キヌハー　トゥイ　カティティ、ミン　ナガラミタン。 兄さんは　木の葉を　取って　水を　流れさせた。
165	ダートゥイシ　ミン　ナガリタン。 ようやく（やっと）水が　流れた。
166	クヌ　カヌミンヤ　ヌマニヌン。 この　井戸水は　飲めない。
167	ターン　ウンニ　マーシクヌ　ミンヤ　ヌマニヌン。 誰でも　こんなに　たくさんの　水は　飲みきれない
168	アクヌティキャル　トゥディチヤ　ハリルン。 あく抜きした　蘇鉄は　食べられる。
169	ツァーリ　ブル／ツァル　ニクヤ　ハニヌン。 腐った　肉は　食べられない。
170	ダガタブニヌチル　マビン　ヌグイ　ブルカ゜、　ハリルナー？ ソーキ汁　まだ　残って　いるけど、食べれる？実現
171	バタ　ンティドゥ　ブルユンガラ、マー　ハニヌン／ハヌン／×ハイ　ツァヌン。 腹いっぱいだから、　もう　これ以上は　食べきれない。非実現
172	チナサル　バスヤ　グンブヤ　ハイ　ツァヌタン。 幼い　ころは　ごぼうが　食べられなかった。
173	アンディルタ、　サー／サギ　イリ　トゥライ／チディ　トゥライ。 溢れる　くらい、　お茶を／酒　入れて　くれ／注いで　くれ。

174	ドゥ　バンギルター、マタニヌン／×マティ　ツァヌン。 湯が　沸くまで、　　待てない。
175	アガミティンタドゥ　アルユンガラ、ンシミ　ブサ　ミヌタカ゜ドゥ、ンヌンディ、ギー　キラヌユンガラ、ンシミタン。 子どもだから、見せたくなかったけど、見るといって聞かなかったから、見せさせた。
176	スナティヤ　チードゥ　サンティ　ナライ　ブタバ、サンティ　ʔカリルン／ティー　ツン。 兄は　　毎日　　練習したので、　三線を　弾ける。
177	サンティ　ティーティ、ドゥチンキ　カミルン。 三線を　　弾いて、　友達に　　聞かせる。
178	アブカ゜　ドゥシ　ツァミ　ブサンディ　ンディタバ、シガタナラヌンディ　マク゜ンキ　フク　ツァミタン。 祖母が　自分で　着せたいと　　言ったので、仕方なく 孫に 服を 着せさせた。
179	ンヌブトゥティ　カール　フク　アガミティンキ　ツァミルン。 おととい　　買った　服を　赤ちゃんに　　着せる。
180	アブタカ゜　ドゥシ　カル　フク　アブタンキ　ンディティ、アガミティンキ　ツァミタン。 おばあさんは　自分が 買った 服を お母さんに 頼んで、赤ちゃんに 着せさせた。
181	ウヌ　アガミティヤ　ターチ　ナイ　ブルユンガラ、ドゥヌドゥシ　フクチー　ツン。 その　子は　　2歳に　なったから、　　自分で　　服が 着れる。

参考文献

・池間苗(1998)『与那国ことば辞典』、自費出版
・池間苗(2003)『与那国語辞典』、自費出版
・上野善道(2009)「与那国方言のアクセント資料（1）」『琉球の方言』34号：1-30、法政大学沖縄文化研究所
・上野善道(2010)「与那国方言動詞活用のアクセント資料（2）」『国立国語研究所論集』34号：135-164、国立国語研究所
・かりまたしげひさ(2013)「与那国語におきた音韻変化」『琉球アジア社会文化研究』16号：60-81、琉球アジア社会文化研究会
・狩俣繁久(2022)「琉球諸語の仮名文字正書法の制定にむけて」『琉球アジア文化論集』No.8、琉球大学人文社会学部紀要
・高橋俊三(1986)「琉球の方言八重山・与那国島」『琉球の方言』、法政大学沖縄文化研究所11号

・高橋俊三(1987)「琉球の方言八重山・与那国島」『琉球の方言』法政大学沖縄文化研究所12号
・高橋俊三(1997)「琉球列島の言語（与那国方言）」『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』：413-422、三省堂
・平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』、東京堂
・目差尚太(2014)「与那国方言において、述語になる運動動詞のアスペクト・テンス・ムード」琉球大学学士論文、琉球大学国際言語文化学科琉球アジア社会文化専攻
・目差尚太(2016)「与那国方言のたずねのモダリティ形式の記述的研究」、琉球大学大学院人文社会科学研究科国際言語文化専攻、琉球アジア社会文化領域修士論文
・目差尚太(2019)「与那国方言のとりたて」『国際琉球沖縄論集』第8号：119-134、琉球大学島嶼地域科学研究所
・目差尚太(2020)「与那国方言のモダリティ体系の記述」、琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻、博士論文
・目差尚太(2022)「与那国方言」、琉球方言研究第6号、琉球大学琉球アジア社会文化専攻琉球方言研究室
・山田真寛,トマ・ペラール(2013)「ドゥナン(与那国)語の言語使用」田窪行則編『琉球列島の言語と文化その記録と継承』くろしお出版
・山田真寛,トマ・ペラール,下地理則(2013)「与那国語の簡易文法と自然談話資料」（琉球諸語の記述について考える）『人文・社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジェクト　成果報告書vol.2』所収、IIOS琉球大学国際沖縄研究所
・米城恵・中澤光平(2021)『どぅなんむぬい辞典』、与那国方言辞典編集委員会、南山舎